外国につながる子どもが ホッとする授業づくり

～教科書を活用したアイディア集～

かながわ国際交流財団

このガイドブックを読んでくださる皆さんへ

外国人住民の増加・定住化に伴い、日本生まれの「外国につながる子どもたち」も増加し、通常学級に在籍している場合も少なくありません。外国につながる子どもたちが学校生活を満喫し、学習に向き合える環境を整えるためには、国際教室担当など一部の先生方だけではなく、学校全体としての取り組みが必要になってきています。

当財団では、2010年度に『日本生まれの外国につながる子どもたち～どうやってサポートすればいいの?～』を作成し、主に小学校の先生方が子どもや保護者とかかわる際のアイデアを紹介しました。本ガイドブックはその続編にあたり、神奈川県内で使用されている小学校の生活科・社会科の教科書を参考に、子どもたちが多文化化が進む学級や地域に気づき、豊かな学びを得られ、同時に外国につながる子どもたちをサポートできる授業づくりのあり方について考えてみました。

日本語の理解が十分でない、会話はできても学習言語が身についていない、家庭が困難な状況にあることなどが原因で、学習に大きな遅れが見られる子どももいます。その解決には取り出しによる指導や、学校以外の機関との連携などが必要な場合もありますが、子どもに最も身近な存在である担任の先生方がかかわれる部分はとても大きいと思われます。

授業の中で、または個別の声かけを通じて外国につながる子どもたちがホッと安心できる工夫について考える機会になれば幸いです。

2012年3月
かながわ国際交流財団

外国につながる子どもがホッとする授業づくり
～教科書を活用したアイデア集～

目　次

第１章　外国につながる子どもと生活科・社会科の授業

1−1　「外国につながる子ども」とは? ……4
1−2　多文化共生の視点からみた学習指導要領……5

第２章　小学校低学年 −自分を大事に思う気持ちを育みたい−

2−1　違うって楽しいね!…… 10
2−2　学校のまわりを探検してみよう …… 12
2−3　四季のうつりかわりと行事 …… 14
2−4　文字やことばに対する関心を高めるために …… 16
2−5　生まれてきた大切なあなたに …… 18

第３章　小学校中学年 −身のまわりから社会へ関心をひろげて−

3−1　まちの中の工夫…… 20
3−2　安全なくらし …… 22
3−3　世界とのつながり …… 24
3−4　ふれてみよう世界の国々（音楽･算数） …… 26
3−5　大人に一歩近づいて　…… 28

第４章　小学校高学年 －歴史や世界を学び、未来への視点を－

4−1　産業学習からみる外国 …… 30
4−2　世界からみた日本 …… 31
4−3　歴史の中の世界と日本 …… 32
4−4　現代につながる歴史 …… 34
4−5　差別・偏見って何だろう …… 36
4−6　身近な外国を知ろう …… 38
4−7　小学校から中学校へ …… 40

第５章　資料集

5−1　関連団体・相談窓口 …… 42
5−2　お役立ちリンク集 …… 44
5−3　関連書籍の紹介 …… 46
5−4　かながわ国際交流財団の事業について …… 47

第1章　外国につながる子どもと生活科・社会科の授業
1−1　「外国につながる子ども」とは?

■「外国につながる子ども」とは?

外国籍をもつ子どもだけでなく、本人の国籍は日本でも、家族が外国にルーツがある子どものことを「外国につながる子ども」と表します。見た目や名前からはすぐにはわからない場合もありますが、国際結婚の増加などもあり、全国的に外国につながる子どもは確実に増えています。

家庭では母語を話し、学校外で日本語に触れることが少ない、日本の伝統・文化や生活習慣になじみがない場合があるので、学校でも配慮が必要な場面があります。また、保護者の日本語理解が十分ではない場合、学校からの連絡が伝わっているか、学校制度や学校文化を理解しているかを確認することも大切です。

■神奈川県に住む外国につながる子どもたち

日本国籍をもつ子どもを含めた外国につながる子どもの正確な数は明らかになっていませんが、外国人登録者数を見ると、中国、韓国・朝鮮、フィリピン、ブラジルが上位を占めています。また、神奈川県では約160の国・地域出身の人々の登録があります。国連加盟国が193であることから、世界のどの地域につながる子どもがクラスにいても当然な時代になったのです。

1−2　多文化共生の視点からみた学習指導要領

中山京子（帝京大学准教授）

■外国につながる子どもに目をむけましょう

日本の児童生徒の学力低下についてメディアでたびたび取り上げられ、教育に関心をもつ人々が増えました。そして、学校教育現場では、読解力、言語活用能力などの向上にむけた取り組みが求められ、2012年（平成24年）4月から幼稚園・小学校で全面実施された新しい学習指導要領のもと、新たな教育活動が展開されています。こうした流れの中で、日本生まれの外国につながる子どもたちに目を向けてみたいと思います。

学校の教員は熱心で、子どものつまずきやSOSに敏感に反応して学習支援をします。また、外国からきた子どもが学習や学校生活で困っていないか気を配っています。しかし、日本で生まれ育ち、日本語を話し、友だちと楽しく過ごしている場合、「うまくやれている」と「みなし」、もしくは「まったく問題ない」と「信じ」、配慮をしないことが多くあります。確かに日常生活における会話の問題はなく、学習に大きなつまづきもない外国につながる子どもが増えています。しかし、教師が気づかない場面で、困ったり、疎外された気持ちになることがあるのです。

例えば、新学習指導要領では、日本の伝統・文化を取り上げることも求められ、国語では「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が加えられ、かるたや百人一首が積極的に学習活動に取り入れられる事例もあります。日常会話には困らない外国につながる子どもであっても、日本語の五七五のリズ

ムのことばの使い方や、読み札の句に出てくる昔ながらの言い回しになじみがなく、家庭で日本のかるたを見たこともないことから、困ってしまうこともあります。カルタ取り大会をグループで競う場合、「うちのグループには○さんがいるから勝てない」などと言われるかもしれません。ある地域では家庭科で「米飯やみそ汁が我が国の伝統的な日常食であることに触れる」ことを推進しています。その時の教師や友だちの「○さんの家は違うね」という一言が、子どもの心には悲しく聞こえることもあります。そんな時、教師がその子がつながりをもつ国の伝統的な日常食を紹介し、どの国にもその地域固有の食文化があることを伝えたいものです。こうした小さな「困ってしまう」「わからない」「仲間に評価されない」場面が積み重なることで、子どもたちは自信をもてなくなったり、意欲を失うことが多いのです。

日本生まれの外国につながる子どもが、笑顔でいることができ、彼ら／彼女らのもっている文化的財産を共有し、神奈川の子どもたちが多文化共生社会の一員として豊かに育つために、教員が教科学習の中で小さな取り組みをしてみましょう。すべての教科、すべての学習活動において取り組むことができる可能性と必要性がありますが、本書ではそのモデルとして、子どもたちの生活に大きくかかわる生活科と社会科を事例に示します。

■学習指導要領から眺める

外国につながる子どもたちを元気づける機会は、異文化理解や外国理解、外国とのかかわりを学ぶ授業の中で頻繁に出てきます。生活科と社会科の学習指導要領解説に示された中から文言を確認してみましょう。

生活科

●低学年の児童においても、身近にいる多様な人々と触れ合い、その発達に応じて他者を尊重する態度や尊敬する気持ち、共に生きていくという考え方をはぐくむことは大切である。また、異なる文化や習慣をもつ人々、障害のある人々とわけへだてなく交流できるようにすることも大切である。<内容の取り扱いについての配慮事項より>

社会科　3・4年

●生産活動における原材料の仕入先や生産物の出荷先、販売における商品の仕入先を調べる際、それぞれにおいて結び付きの見られる県や国の名称と位置を地図などで確かめる活動をおこない、生産や販売を通して自分たちの地域が県内だけでなく国内の他地域や外国ともかかわりがあることに気付くように配慮して指導する必要がある。<内容（2）イ（内容の取り扱い）より>

●「人々の生活や産業と国内の他地域や外国とのかかわり」を調べるとは、生活や産業に見られる他地域とのかかわりを取り上げ、県内の人々の生活や産業は、県内だけでなく、広く国内の他地域や外国とも結び付いていることを具体的に調べることである。県内の人々の生活や産業と他地域とのかかわりについては、例えば、姉妹都市提携を結び外国の都市とさまざまな交流事業をおこなっていること、船や飛行機、鉄道、自動車などの交通手段を利用して国内の他地域や外国との行き来が盛んにおこなわれていること、外国や他の県から観光客を招き入れていること、農業や工業において原材料の仕入や生産物の出荷などの面で国内の他地域や外国と結び付いていることなどを取り上げて調べることが考えられる。<内容（6）エ解説より>

社会科　5年

●「主な国」の取り上げ方としては、例えば、近隣の諸国を含めてユーラシア大陸やその周りに位置する国々の中から10 か国程度、北アメリカ、南アメリカ、アフリカ、オーストラリアなどの大陸やその周りに位置する国々の中からそれぞれ2か国程度を選択することが考えられる。指導に当たっては、地図帳や地球儀などを活用しながら取り上げた国の名称と位置を確認するようにする。
<内容（1）ア（内容の取り扱い）より>

●「食料の中には外国から輸入しているものがあること」を調べるとは、主な食料の自給率や主な輸入先などを取り上げ、国民の食生活を支えている主な食料の中には、国内の各地で生産されたものだけでなく、外国からの輸入に依存しているものがあることを具体的に調べることである。<内容（2）ア解説より>

社会科　6年

●「外国の人々と共に生きていくためには異なる文化や習慣を理解し合うことが大切であること」を考えるようにするとは、我が国と経済や文化などの面でつながりが深い国の人々の生活の様子を調べることによって、外国の人々の文化や習慣の違いに触れ、その違いを理解し尊重することが、外国の人々と共に生きる上で大切であることを考えることができるようにすることである。その際、これまでの学習で身に付けた自国に対する理解との関連を図りながら、外国の異なる文化や習慣を適切に理解できるように配慮する必要がある。
<内容（3）解説より>

●外国語活動での異なる文化をもつ人々との交流体験を生かすなどして、外国の文化を具体的に理解できるようにし、それを通して我が国や諸外国の伝

統や文化を尊重しようとする態度を養うことが大切である。これらの学習を通して、外国の人々と共に生きていくためには、異なる文化や習慣を理解し合うことが大切であることを考えることができるようにする。<内容（3）ア解説より>

学習指導要領解説に示されている外国とのかかわりは、以上がすべてではありませんが、外国とかかわる学習活動は総合的な学習の時間の国際理解に関わる学習や6年生社会科の国際理解学習の単元だけではないことがわかります。生活科、社会科3･4年生の地域学習、5年生の農業･産業･国土の学習においても異なる文化、外国とのかかわりを学習することが求められています。このことをふまえて、外国につながる学習を積極的に生活科や社会科の指導計画、単元、授業の中で取り上げていきたいものです。そして外国につながる子どもたちがもっている文化的背景や知識を活用して学級の学びを豊かにし、同時に、外国につながる子どもたち自身も元気がでる場面をつくりましょう。

授業場面から眺める

では、具体的にはどのようにしたらよいでしょうか。そのヒントは教科書に見つけることができます。教科書は、学習指導要領を具体化して学習内容を導いているだけでなく、さまざまな視点を配慮して作成されています。異文化理解、国際理解、多文化共生の視点も組み込まれています。挿絵や写真にも、外国につながる内容や人びとが含まれています。そこに込められたメッセージを授業で子どもたちと読み解いてみることもできます。

本ガイドブックでは、生活科と社会科を中心にして、学習内容や教科書記述例を取り上げながら、実際の授業において教師が外国につながる子どもにどのように声かけをしたりサポートをしたりできるか、具体的に示しています。教師が気づかない心の様子も示しています。本ガイドブックを手がかりに、他の教科領域での活動にアイデアをひろげてみてください。

第2章　小学校低学年 －自分を大事に思う気持ちを育みたい－
2－1　違うって楽しいね!

■教科書に登場する多文化

低学年で使用する生活科の教科書には、子どもたちが日常を過ごす学校やまちの様子を描いたイラストや写真が登場します。まず教科書を手にとって探してみてください。髪や肌の色が違うなど、どこかにかならず「外国につながる子どもたち」が掲載されているはずです。年齢が異なる人、障がいをもった人など、多様な人々が共に生活しているということを、教科書は伝えています。外見や言語、文化的背景は多様でも、皆同じまちに住む仲間なのだ、ということを機会を捉えて伝える工夫をしましょう。

■「違い」を意識している子どもたち

特に外見や名前、雰囲気などがまわりの友達と異なる場合、子どもたちは「違い」をかなり小さい時から意識しています。テレビなどの影響か「私、ガイジンなんだ」などと言っている場合もあります。中には、皆と違う自分を肯定的に捉えられなかったり、状況を理解できずに気持ちが不安定になってしまう子どももいます。

教科書に自分と同じ背景をもつ子どもが登場しているのを発見すれば、安心することができ、力になるでしょう。教科書を活用して「一人じゃないんだ」という気持ちをもてるようなサポートをしてください。本ガイドブックの巻末の絵本リストなども活用してみてください。

外見や名前からすぐにはわからないけれど、両親のどちらかが外国につながる子どもも多くいます。保護者の日本語理解が十分ではなく、学校や学級からの通信などが読めないことで恥ずかしい気持ちになったり、皆と同じになりたいと思っている場合もあります。違うことは素晴らしいことで、隠したり恥ずかしく思わなくてよいのだと伝え、可能な範囲でサポートしましょう。

■まわりの子どもへの働きかけ

子どもの日本語習得がまだ十分でない場合、「日本語ができない＝能力が低い」と捉えられてしまうことがあります。「日本語だけでなく、もう一つのことばができるなんてすごいね!」などと声かけをしてみましょう。

また、まわりの子どもたちは「日本語以外の言語＝英語」と捉えてしまうこともあります。そんなときに、「これは○○語というんだよ」などと伝え、ことばや文化にまつわる話を紹介する機会にすることもできます。

子どもたちが多文化を意識したときに、多様な国・地域のことばや遊び、食生活を紹介する機会をつくりましょう。出身国のあいさつや遊びを教えてもらったり、ゲストとして授業で話をしてもらうなど保護者に協力を得ることもできます。授業の中で取り上げるだけでなく、給食で多様な食文化を紹介するなどのアイデアもあります。巻末の本や資料も参考にしてください。

コラム<保育園で出会った女の子>

M.K.さん（保育士、ペルー出身）

12歳で来日し、最初は日本語もできず日本での将来に悩んだ時期もありましたが、小さいころから子どもが好きだったので、短大で保育士の資格を取得しました。実習をした保育園で出会った外国につながる女の子に「先生と私の肌の色、同じだね」と言われました。お絵描きで自分の顔を描いている時、肌の色が似ている私を見て仲間だと思ったのかもしれません。保育園では、通訳や翻訳など保護者のサポートも大事ですが、ことば以上に子どもたちの気持ちに寄りそう姿勢を大切に保育に取り組んでいます。

2−2　学校のまわりを探検してみよう

■まちの中で探してみよう

生活科の授業では、自分が住む地域に出かけてさまざまな場所を調べる活動があります。子どもたちの観察眼はすばらしく、大人では気がつかない細かいことでもしっかり見ています。まちの中の多文化を探す際にもその力を発揮できるように、事前学習などでヒントを示してみましょう。

例えば外国人が集住する地域では、食材店や教会など人々が集まる場所が増えています。まちの中でも中華料理やインド料理など外国人経営のレストランもよく見かけるようになりました。

まち探検の機会に、そのようなお店の人に話を聞くことができれば、異なる言語、文字、習慣をもつ人が身の回りに生活していることに気がつくことができます。子どもの保護者が外国人コミュニティの諸活動にかかわっている場合もあるので、まずは先生方が下見をし、新たな出会いや保護者の背景理解につながる可能性を探ってみましょう。

かながわエスニックレストランマップ
http://www.k-i-a.or.jp/kokusai/tabunka/ethnic/

■多言語表記を探す

身近な駅や公共施設、標識などで日本語以外の言語も増えてきました。低学年はマークや文字に対する関心が高まる時期なので、まちの中の異なる表記を見つけることで、多文化への興味をもつきっかけをつくりたいですね。

優先席や車椅子用のスロープなど、まちには皆が安心して生活するためのツールがあり、手話や点字、盲導犬と並んで、日本語を母語としない人々のためには多言語表記が必要であることも伝えることができます。

■○○さんがつながる国

まちの中の多文化にふれる機会をつくることで、学校の中の多文化にも気づくことができます。学校の中に、国際教室などがある場合、外国の様子がわかる掲示物や展示物があることも多いでしょう。そのような場所を探検することも、国際教室がより開かれた場所になることにつながるかもしれません。

学校の中で使われる資料については、多言語に翻訳されたものが公開されています。保護者のサポートのために使えるものも数多くあるので、ぜひ活用しましょう。学校文書の多言語資料を検索できるサイトもあります。

かすたねっと
http://www.casta-net.jp/

■学校の中の多文化な人材

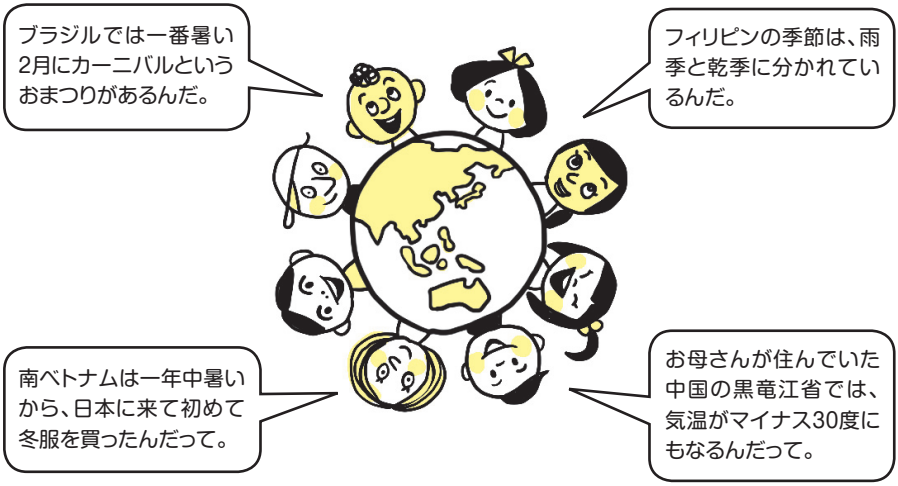
小学校にも外国語活動が導入され、外部講師を依頼している学校も増えました。ALT（外国語指導助手）と呼ばれる先生たちの出身は多様ですが、学校に在籍する子どものつながる国と重なる場合もあるのではないでしょうか。子どもたちにとって、ルーツが同じ先生がいることは誇りになることですし、子どもや保護者が困った時に力になってくれるかもしれません。勤務時間は限られていますが、休み時間などを活用して交流を深めたり、サポートしてもらうこともできるのではないでしょうか。

2−3　四季のうつりかわりと行事

■四季のうつりかわり

生活科の授業では、身近な自然や四季のうつりかわりを取り上げることが多くあります。外国につながる子どもたちは「春は桜・チューリップ」「秋は紅葉や落ち葉」という、当たり前に思いがちな四季のイメージを共有できていないことがあります。そこで関連する絵本を紹介するなどして、イメージが膨らむような工夫ができるとよいですね。季節や行事にまつわる宿題を出す場合も、日本文化や生活習慣になじみの浅い保護者に対する配慮が必要です。

また、「梅雨はジメジメ」「冬はカラカラ」という天候や季節感も実は世界共通ではなく、明確な四季の区別がない国・地域もあります。気候にまつわる他の国・地域の話を授業で紹介するのも新鮮かもしれません。



■文化的・伝統的行事について

日本で生まれ育ち、日本の学校生活にも問題なくなじんでいるように見える子どもでも、桃の節句や端午の節句などの日本の伝統的な行事を家庭でおこなうことがないため、生活科や国語科の教科書に掲載されている季節のことばにピンとこない場合があります。家族で出かけて季節を感じる体験をすることが少ない子どももいるかもしれません。

知っていることを当たり前と思わず、「そういえば、おせち料理って知っている?」などと質問して、写真を見せたり、由来を説明してみましょう。このような小さな情報の積み重ねが、学習に対する関心を高め、もっと知りたいという気持ちにつながるのではないでしょうか。

■世界のいろいろな正月や行事を知る

お正月といえば、1月1日の元旦、と思いがちですが、別の時期にお正月を祝う地域も多くあります。例えば、中国や朝鮮半島、ベトナム、モンゴルなどでは、旧暦で正月が祝われ、それぞれ春節、ソルラル、テト、ツァガーンサルと呼ばれています。

そのほか、ソンクラン（タイ）、チャウル・チャナム・テゥメイ（カンボジア）、ピーマイラオ（ラオス）など4月に祝う地域や、ディーワリー祭（ヒンドゥー歴）、ボイシャキメラ（ベンガル歴）、レバラン（イスラム教）など時期もさまざまです。

母の日、子どもの日などを日本とは異なる時期に祝ったり、恋人の日などがある地域もあります。保護者の協力を得て家庭で祝う行事を紹介できれば、子どもたちが異なる文化の豊かさを知る機会になると同時に、先生が子どもの文化的背景を知る機会にもなります。

2−4　文字やことばに対する関心を高めるために

家庭で日本語以外の言語を話し、読み聞かせや日本の伝統行事などへの参加の機会が少ないことが多い外国につながる子どもたち。国語学習の基礎となる語彙力、興味・関心、想像力など、年齢相応のものが身についていない場合もあります。

保護者の日本語の読み書きが難しい場合、家庭に日本語で書かれた新聞や本などがなく、日本語に触れる機会も少ないため、文字に対する苦手意識を抱きがちです。文字に対する抵抗感を和らげ、関心のある本を読んだり、文章で自分を表現できるように、少しずつサポートをしていきたいですね。

■ひらがなの学習

「しりとり」やなぞなぞ、ダジャレなど幼児期の遊びを通じて自然にことばを身につけていく機会が少ない外国につながる子どもたちもいます。そのため、小学校1年生ではじめて文字に触れてもイメージが膨らまず、ひらがなが覚えられない、長音や拗音、助詞の使い方が身につかない場合などもあります。

教科書に例示される単語を知らない場合も多いので、関心や経験から知っていることばと結びつけて、少しずつ練習していきましょう。

■片仮名は外来語？

小学校学習指導要領解説では片仮名の学習の際に「擬声語や擬態語、外国の地名や人名、外来語など片仮名で書く語がどのような種類の語であるかを知」ることを推奨しています。

子どもたちが自分の名前やつながる国を実際に片仮名で書き、「外国」につながると意識する初めての機会になるかもしれません。名前の由来を聞いたり、国のことを紹介する機会にしてみてはどうでしょうか。

■漢字の学習

子どもの日本語の語彙が少ないと、単語を聞いても漢字が連想できず、書き取り練習だけでは漢字がなかなか身につかない場合があります。漢字の読み方と意味、使い方を結びつけて練習していく工夫が必要です。また、ことばに関心が出始めた時に自分で調べられるように、国語学習辞典の使い方を教えてみてはどうでしょうか。家庭に辞書がない場合、保護者にもすすめてみてください。中古本であれば比較的安価に入手できます。

■ローマ字の学習

外国語活動の授業の一環で、名札をローマ字で書くことがあります。ローマ字でどう表記するかは子ども本人ではわからない場合もあるので、パスポート上の表記や本人・家族の希望などを保護者にも確認しましょう。保護者とのコミュニケーションを深めるきっかけにもなりますね。

コラム　<どうやって読む?　書く?　子どもたちの名前>

国によって、名前の表記や読み方は多様で、ローマ字で表す場合もヘボン式とは大きく異なる場合が多いので、入学時や新学期に保護者に確認しましょう。また、子どもの成長に応じて名前に対する考えが変わりますし、帰化などをきっかけに日本名に変える選択をすることもあります。名前はアイデンティティに関わる大事なものなので、子どもの気持ちに寄り添い表記についても話し合ってみましょう。

2−5　生まれてきた大切なあなたに

生活科では、自分の生まれた時の様子や育ってきた過程などをふりかえり、成長していることへの気づきを深め、喜ぶ気持ちを育てるという学習活動があります。具体的な取り上げ方はさまざまですが、子どもたちが生まれた時の話を聞いたり、写真を集めたりするなど、家族の協力が必要なことが多くなります。

家族の絆が強く、保護者が子どもにたくさんの愛情を注いでいる外国人家庭も少なくありませんが、日本語で出された課題の指示どおりに必要な情報や物品を揃えることが難しい場合もあります。

それぞれの家庭のあり方を受けとめ、子どもが大切にされていることを実感するためには、サポートが欠かせません。個人面談などで保護者と話す機会に、通訳を交えて直接説明したり協力をお願いしたりするなど、事前に準備をすることもできます。

また、母語で書いた手紙を翻訳してクラスで紹介するなど、外国人保護者の思いを子どもにしっかり伝え、安心して学校生活に臨むきっかけになればよいですね。

母国の写真や子育てに使った品々などをクラスで紹介することができれば、子どもたちが、異なる文化や生活を知るよい機会にもなるのではないでしょうか。

実践例

＜「自他を認め、大切にする気持ちを育てる授業」をめざして＞

門原　香織（横須賀市立追浜小学校養護教諭）

人権教育の一環として、3年生を対象に「生まれる前の私たち」という主題で授業をおこないました。受精から出産までの過程について学び、事前に調べてきた胎内にいるときや出産時の家族の思いをクラスの人たちに発表しました。

すべての子どもが安心感をもって参加できる授業を目指し、調べてきたこと（事前学習）が授業の柱となるような指導の展開を考えました。わが校には外国につながる子どもも多いため、事前学習の際に家族の協力が得られるように、担任や国際教室担当者にもサポートしてもらいました。授業では誰もが自信を持って発表できるように、自分が調べてきたことを決められた文章にあてはめながら発表する形式にしました。これは国際教室の授業でおこなわれていた方法です。

当日は、外国につながる子どもたちも積極的に発言し、つわりの時に母親が食べたくなった母国のフルーツについての話も出てきました。そこで国際教室担当者がそのフルーツについて紹介し、国際理解にもつながりました。他の学習では発言することにためらいがちな子どもも発表することができ、聞いている子どもたちも真剣でした。

妊娠中の苦労や出産時のトラブルなどを語ってくれた家族もいたため、自分たちは簡単に生まれてきたわけではないこと、国籍や男女の違いに関係なく、どの子も大切にされてきたことを共有することができました。自分だけでなくまわりの人の命も大切にしなくてはいけないことにも気づくよい機会となりました。

第3章　小学校中学年 －身のまわりから社会へ関心をひろげて－
3－1　まちの中の工夫

■公共施設についての理解

小学校中学年は学区内から市町村への関心のひろがりにともなってさまざまな人と出会い、社会の仕組みを学ぶ時期です。しかし、外国出身の保護者は公民館や図書館、博物館などの公共施設を利用する機会が少ないこともあり、子どもたちもそうした施設の名前を知らず、またその目的や役割についての理解が浅い場合がみかけられます。

また、ふだん利用している公共交通機関であっても、バス停や路線の名前を知らないことも意外に多いです。保護者が日本語を理解していない場合、地名などを聞かれても答えられず、子どももそれ以上の情報を得られないままになってしまう場合もあります。

「郵便局」「市役所」「交番」など身近にありながらその名称を知らないこともあるので、各施設にはそれぞれ名前や役割があることを理解できるように、伝えていきましょう。その際に、その子につながる国の社会のしくみなどを、本やインターネットで調べて比べてみると、子どもたちの関心を高めるきっかけになります。

■バリアフリーについて学ぼう

バリアフリーというと、点字ブロックや車椅子用のスロープなどが思い浮かびますが、日本語での情報をキャッチしにくい外国人に対する「言語バリアフリー」ということばも使われるようになってきました。

まち探検などで、バリアフリーの例を探す機会があったら、「日本語が読めない人のために、どんな工夫がされているか」という視点も紹介しましょう。駅やバス停、公共施設などローマ字や多言語で表記してある場所が意外に多いことに気がつくことができるでしょう。

実践例　＜図書館で本を借りよう＞
（つるみ学習支援教室でのボランティアによる活動）

公共施設になじみのない外国につながる子どもたちが、実際の活動を通して社会のしくみや手続きの仕方を学ぶ活動をおこないました。図書館では、難しい本だけではなく、マンガやサッカーの本などがあり、無料で借りられると聞いて、子どもたちは生き生きとした表情で本を選んでいました。

【ステップ1】郵便局でハガキを買おう

図書館カードの発行に必要な住所証明になる自分宛の郵便物のために、ハガキや切手を購入。窓口の人に伝わるように、練習をしてから郵便局に向かいました。

【ステップ2】自分宛に手紙を書こう

手紙を書く機会が少ないので、住所や宛名の書き方を学びました。内容を確認して、ポストへ投函。時期によって年賀状や暑中見舞にもできますね。

【ステップ3】図書館でカードの発行手続きをしよう

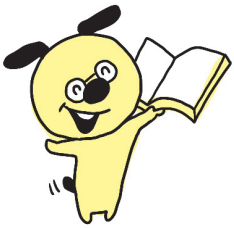
自分宛に届いた郵便物をもって図書館へ。申込書に必要事項を記入して申し込み、自分の名前が入ったカードをもらえた時の喜びはひとしお!

【ステップ4】図書館で本を探そう

司書の人に案内してもらい、授業で使う本、興味のある本がどこにあるか探しながら図書館の中を探検。蔵書検索機の使い方も教えてもらいました。

【ステップ5】図書館で本を借りよう

好きな本を見つけ、貸出手続き。返却日や返却方法も確認し、おはなし会など図書館でおこなわれている行事についても教えてもらいました。



3−2　安全なくらし

■地球規模での自然災害

2011年に東日本大震災が発生し、災害発生時の対応について今まで以上に考えることが必要になりました。社会科の学習の中でも、地震や津波を取り上げることも多いのではないでしょうか。

日本は地震大国ですが、スマトラ北部（2004年）、中国四川省（2008年）などでも大規模地震が起きており、チリ中部地震（2010年）発生時には、津波が日本を含めた環太平洋全域に達しました。

地震で被害を受けた地域につながりのある子どもがいるかもしれません。復興支援では国際的な支援が相互におこなわれていることを知り、世界の人々がつながっていることを実感する機会にすることもできます。

■地震の時、外国人は・・・

災害発生時、日本語の理解が十分ではない外国人住民は、高齢者や障がいをもつ人々などと並び「災害弱者」に位置づけられています。家庭での防災の備えは万全か、日本語でのコミュニケーションが難しい保護者と緊急時の連絡をどう取るか、今一度考えてみる機会ではないでしょうか。

神奈川県内の自治体でも、外国人向け防災訓練をおこなったり、防災に関連した多言語情報の発行などをしています。そのような資料も授業で活用してみましょう。

（財）消防科学総合センター『地震に自信を』（英語、中国語、ポルトガル語、韓国・朝鮮語）
http://www.bousaihaku.com/cgi-bin/hp/index2.cgi?ac1=B934&ac2=&ac3=3907&Page=hpd2_view

かながわ自治体の国際政策研究会『地震に自信を』（スペイン語、カンボジア語、ラオス語、ベトナム語、タガログ語、タイ語）
http://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/attachment/16755.pdf

インタビュー<外国人住民との共生事業に取り組む>

石井孝さん（神奈川県秦野警察署長）

警察には、出身や国籍を問わず、住民の皆さんの生命を守る責務があります。一番身近な存在として、地域の中には交番・駐在所があり、困った人がいる現場に駆けつけられる所からまちの安全を守っています。

秦野市には多くの外国人の方が住んでいますが、言語や習慣が異なるため、彼らが安心して生活を送るためのサポートには工夫が必要になります。例えば交通標識は世界共通といわれていますが、国によって解釈が異なる場合があるので、母語できちんと説明することが重要です。

秦野警察署では、外国人住民向けの「多文化共生ワークショップ」を定期的に開催し、交通ルールや災害時の対応などについて説明する機会をつくっています。お客さんとして来るだけではなく、スピーチを発表したり、各国の料理を紹介するなど、外国人の皆さんにも積極的に関わってもらい、活発な意見交換をする機会となっています。ワークショップを通じて、外国人として感じるちょっとした生活の不便さなど、私たちが気づかない部分を学ぶことも多いです。

私も海外で生活した経験がありますが、異なる文化をもつ人々が一緒に住むことは素晴らしいことだと思います。違いを認め合ってともに地域をつくっていくために、外国の人々が不安に思っていることをしっかり把握して、彼らの感性に寄り添った情報提供や共生のあり方について考えていきたいと思っています。

3−3　世界とのつながり

■世界各地から来る品物

私たちの身の回りにも、世界中から輸入された品物が多く見受けられるようになりました。食品だけをみても、世界中からさまざまなものが日本に輸入されています。ブラジルからのオレンジジュースや鶏肉、フィリピンからのバナナなど、子どもたちがつながる国・地域から多くの品々が輸入されています。

また、ラーメンや餃子、キムチなど、よく食卓に上るけれど実は海外からもたらされた料理も多くあります。世界地図や地球儀を使って品物の流れや世界とのつながりを実感したり、世界の気候や風土を紹介するきっかけにしてみませんか。外務省や各国大使館のホームページで多様な情報を入手することができます。

■世界とつながる友好交流

神奈川県や県内の各市町村は、世界のさまざまな地域と友好交流をしています。中国や韓国など交流が盛んな地域もあり、友好交流先等の情報は県や市町村のホームページで情報を調べることができます。

神奈川県国際課　国際交流・国際協力への取組み
http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f3532/

■テレビや雑誌も活用して

ワールドカップやオリンピックなどスポーツの国際大会でも、世界の国々が参加しています。テレビでは外国につながりのある人たちが活躍していますし、世界のさまざまな文化や習慣を取り上げる番組も増えてきました。自分がつながる国や地域が好意的に取り上げられる番組の存在を知るだけで、うれしいでしょうし、もっと知りたいというきっかけになるのではないでしょうか。

実践例　<しなものはどこから?>

成川　弥生（横須賀市日本語指導員、元国際教室担当）

―3年生のブラジルにつながる児童との学習―

国際教室に在籍するブラジルにつながる子どもを対象に、母学級と連携して、教科学習と日本語の学習に関連づけた授業をおこないました。

①生活経験が少ない子だったので、授業前にスーパーやコンビニに行って、実際に買い物をしました。その際に、食料品売り場、日用品売り場、レジなどのスーパーマーケットに関連することばも学習しました。

②買ってきた食品の表示から、賞味期限などとともに、原産地の表示があることを知りました。

③母学級でスーパーのチラシについて学習をした後、国際教室では、チラシ掲載の野菜、肉、魚などの産地表示を中心に調べました。国内産については都道府県名を、外国産については国名と品物をそれぞれ、日本地図、世界地図上にあらわしました。

④ブラジル産の食品については、チラシ以外でも調べ、母学級でもおこなっている学習新聞にまとめました。

⑤母学級で学習新聞の発表をしました。担任の先生にほめられて、この児童は、笑顔で発表を終えました。

この学習で、世界の国と日本の食卓がつながっていることが理解できました。また、ブラジルとの食のつながりを母学級の児童と共有できたのもよかったです。

食べ物以外でも、世界の国々と日本とのつながりを考えるきっかけになればよいと考えています。

3−4　ふれてみよう世界の国々

生活科・社会科以外の教科でも、異なる文化や考え方にふれる機会をつくることのできる例をいくつか紹介します。

■音楽

音楽の授業では、曲、楽器、リズムなどを通して、世界の国とふれあうことができます。3年生でフィリピンの「レロンレロンシンタ」（教育出版）、5年生で朝鮮半島民謡の「アリラン」、6年生でボリビアの「アンデスのまつり」、ペルーの「コンドルはとんでいく」（教育芸術社）など、県内の学校に多く在籍する子どもたちとつながる国・地域の曲も教科書には載っています。低学年では、3拍子の曲に合わせて、バンブーダンスをするのも楽しいでしょう。

実践例　＜保護者を講師に迎えて＞

3年生の音楽の授業でブラジル出身の保護者に、サンバの踊りや手遊びを教えていただきました。講師はとても明るく子どもたちに接してくださり、踊りを楽しむ姿に子どもたちも思わず体が動いてしまうようでした。

「ミャウ」「ジギジギザ」という歌と手遊びを教わった後は、3年生が、低学年の生活科の時間にその遊びを教え、みんなで楽しみました。

＜ひょうたんを育てて＞

世界の民族楽器に、共鳴具としてよく使われているひょうたん。4年生の理科の学習でひょうたんを育て、実ったひょうたんを使って、笛、マラカス、ギロなどの楽器を作りました。サンバのリズムに合わせて演奏し、楽しいひとときを過ごしました。

■算数

指で数を数えるとき、どの指からどのように数えていきますか。数え方も国により、違いがあるようです。また、指を使ってかけ算をおこなう国もあります。

小学校3～4年生で学ぶ割り算。4年生で筆算の学習が始まりますが、割り算の筆算は国・地域によって、いろいろな形式があります。日本と同じ形式の国（アメリカ、フィリピンなど）もありますが、割る数と割られる数の位置が反対だったり、答を書く場所が異なったりする国があります。

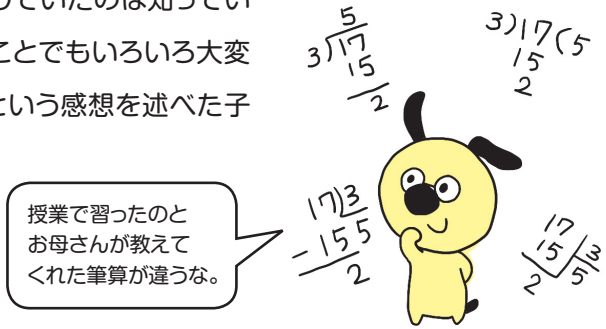
あえてこの異なる筆算の仕方を学級で紹介すると、違うことのおもしろさ・難しさを実感する機会になります。また、保護者が宿題や日本の学校の学習にかかわる難しさを知ることもできるでしょう。

実践例　＜世界の割り算＞

ペルー出身の児童がいる学級で、世界の割り算を紹介しました。

グループごとに日本とは異なる筆算形式の問題を解き、その解き方と感想を発表しました。ゆっくりなら解けるのですが、日本の方法に慣れていると、計算しにくいことに気づきました。その時に、外国から来た友だちのたいへんさが実感できたようです。ペルーでは、割る数と割られる数の位置が日本と反対だからです。

「ことばで苦労していたのは知っていたけど、その他のことでもいろいろ大変だったんだろう」という感想を述べた子どもがいました。



3−5　大人に一歩近づいて

■2分の1成人式

小学校4年生の終わりに、成人の半分に達したことを祝う「2分の1成人式」をおこなう学校があります。誕生から今までを振り返り、成人までの10年を考える機会ですが、外国につながる子どもたちにとって、自分の将来像を思い描くのは難しいことがあります。進学や就職について日本でどのような選択肢があるのかを知らないこと、自分の身近にモデルとなる先輩が少ないことなどが理由として考えられます。

卒業生や地域に高校や大学に進学した外国につながる先輩たちがいたら、学校に招いて話をしてもらうのはどうでしょうか。「自分もああなれるかも」と大きな励みになると思います。

■保護者に対するメッセージ

子どもの成長とともに親子の関係も変わってくる時期です。日本語ができない保護者に対して見下すような態度をとったり、恥ずかしいという感情を抱いてしまっている子どももいるかもしれません。

2分の1成人式で保護者に対するメッセージを伝える取り組みをしている場合、外国につながる子どもたちから保護者に対する複雑な気持ちを聞き取った上で、保護者へ贈ることばを一緒に考えてみましょう。日本語指導協力者や通訳の協力を得て、母語でのメッセージを送るのも一案ですね。

コラム　<ホッとできる教室>

小菅 真人 / Jesse K Frivaldo（会社員）

生まれも育ちも国籍も日本、日本名・日本語話者の「日本人」として良くも悪くも日本に順応した小学校時代を過ごした私だが、ふと思い出したことがあったので少しだけ紹介したい。

社会科の授業で、ジャポニカ米とインディカ米の違いが取り上げられたことがあった。フィリピンの田舎で広大な田畑を見たことのあった私は、祖母がフィリピンでインディカ米をつくっていることを少し得意げに担任の先生に伝えたところ、そのお米を授業で紹介しようという話になった。祖母からの小包で届いた米は級友に少量ずつ配られたのだが、中に一人だけ「キタナイから」と米を手のひらで直接受けることを拒んだ子がいた。

タガログ語も話せず、エスニックコミュニティにも属さない私にとって、フィリピンとはいつでも「家族の記憶」であった。家に帰れば、フィリピン人である母のつくる家庭料理が「日常」であり、母方の親戚を通して、フィリピンはいつも心のどこかにあった。

幸運にもそれまで周囲から不当な扱いを受けてこなかった自分が、このとき初めて理不尽な怒りを感じた。「キタナイから」のたった一言で、フィリピンはおろか、母、祖母、そして私のすべてが否定されたような気がしてならなかった。

その子に殴りかかろうと立ち上がろうとしたその時、先生がその子のお米をすくいあげ、生米のまま口の中に入れたのだった。もぐもぐ噛んで「おいしいのに」と一言。それを真似て、まわりの同級生も生米をボリボリほおばりだす姿を見て、その子はひどく赤面し、私はなぜか勝ち誇った気持ちになったのである。今でも先生の何気ない行動に感謝している。あの先生は元気だろうか。

第4章　小学校高学年 ー歴史や世界を学び、未来への視点をー
4ー1　産業学習からみる外国

■経済のグローバル化と外国人住民

日本に在住する外国人の数は1990年以降に急増しましたが、就労を目的に来日した人も多く、社会科の教科書で登場する自動車産業に従事する外国人は少なくありません。また、コンビニエンスストアの弁当製造工場など、24時間稼働の工場で夜勤の仕事をする保護者もいるかもしれません。

経済のグローバル化と人の移動は密接に結びついています。産業について学習する単元は、外国につながる子どもたちの保護者がどのような経緯で日本に来たのか、どのような仕事に就いているかなども考える機会になるのではないでしょうか。

重労働に従事し、長時間勤務している保護者に対して子どもたち自身が否定的な感情を抱いている場合もあるかもしれません。授業で具体的な例を取り上げるとき、外国につながる子どもがどのように感じているかについても配慮できるとよいですね。

■産業でつながる世界

2011年に発生したタイの洪水で、多くの日本企業が影響を受けました。このようなニュースで取り上げられる話題も、外国と日本の結びつきを考えるきっかけになります。

また、日本で操業していた工場の海外への移転が、外国につながる子どもたちの保護者の雇用に直接影響がある場合もあります。家庭で新聞を購読していない、日本のニュース番組を見ない外国人家庭も多いので、授業で新聞記事なども活用して、具体的な例から世界とのつながりと産業について考えてみましょう。

4−2　世界からみた日本

■世界の主な大陸、海洋

社会科では、世界の国々の自然環境について学びます。まずは地図帳や地球儀で国々の位置関係を見てみましょう。朝鮮半島や中国、フィリピンなど子どもたちがつながる国や地域が予想以上に近いことに気づくと思います。逆に、南米からみたら地球の裏側に日本がある、ということが分かります。飛行機で移動するにはどのくらいの時間がかかるんだろう、赤道を境に北と南で季節が逆なんだね、と地図を見ながらいろいろな発見があると思います。

■つながる国を再発見

日本で生まれ育った子どもの場合、自分のつながる国・地域について知る機会も限られているため、社会科の授業は改めてその地域の位置や自然環境を確認する機会になります。地図帳にも世界の国々についての情報が載っていますが、さらに子どもたちの関心を深められるように、関連資料や本の紹介などもできるとよいですね。

諸統計データや世界遺産、特徴的な自然環境などを知り、つながる国だけではなく、自分自身についても肯定的に捉えられる機会になればよいですね。家庭で保護者と子どもが母国について話をするきっかけになるかもしれません。

4−3　歴史の中の世界と日本

外国につながる子どもたちにとって、日本の歴史の学習は予備知識やイメージがあまりなく、なじみにくい分野の一つです。聞いたこともない地名や人名が登場する教科書に、苦手意識をもってしまう場合もあるでしょう。でも、その中にも、自分とつながりのある部分があると知れば向き合い方が変わってくるのではないでしょうか。

歴史学習において、教科書にも多くの場面で外国が登場します。自分とつながりのある国と日本との間に古くから交流があると知ることで、歴史学習にもぐんと興味がわくことがあります。関連の本や資料を一緒に探したり、保護者の協力を得るなどして、歴史学習に関心をもつ工夫をしてみましょう。

■歴史の中の交流

すぐれた文化が中国や朝鮮半島からもたらされたこと、中にはシルクロードを経て遠くペルシャなどから運ばれた品々もあることなどを知ることで、日本と世界の昔からのつながりに気づくことができます。世界地図や地球儀を見ながら、人や物の往来を知ることで、一つの国にとどまらない、大きな歴史の流れをイメージすることができます。

日本の歴史においては、ユーラシア大陸との交流や交易がさかんにおこなわれてきましたが、中南米原産の唐辛子やさつまいもが日本に伝来した経緯などにも物語があります。一つの国・地域と日本のかかわりについてはインターネットでも多くの情報を得ることができます。

■日本語になった外国語

<アラビア語・ペルシャ語>

「レモン」「琵琶」「ぶどう」など意外に数多くのことばがなじみのある日本語として既に使われています。奈良・平安時代は主にペルシア語起源のことばが中国語（漢語）を通して、安土桃山時代以降は、ポルトガル語やスペイン語、オランダ語を通して、そして明治以降には英語やフランス語を通して、多くの単語が日本語として使われるようになりました。

<ポルトガル語>

種子島にポルトガル人を乗せた中国船が漂着したのは、1543年と言われています。日本とポルトガルの文化の出会いや交流で「てんぷら」や「カステラ」ということばが持ち込まれ、食文化も紹介されました。

■意外に古い日本と外国のかかわり

下記に取り上げたのは、ほんの一握りの例です。外務省のホームページなどに各国・地域との交流についての情報があります。ぜひ子どものつながる国について調べてみてください。

朝鮮半島	1607～1811年	朝鮮国王が朝鮮通信史を日本に派遣
タイ	1609年～	御朱印船による対タイ交易、アユタヤの日本人町の成立
メキシコ	1609年	千葉県沖で座礁したサンフランシスコ号乗員を救助
フィリピン	1888年	フィリピン独立の闘士ホセ・リサールが日本に滞在
トルコ	1890年	和歌山県沖で遭難したエルトゥールル号乗員を救助

4−4　現代につながる歴史

6年生で学習する歴史の中でも、特に20世紀以降の出来事は、神奈川県内で学ぶ外国につながる子どもたちの家族が歩んできた歴史と密接なかかわりがあります。戦争によって人生を大きく翻弄され、大規模な移動を余儀なくされた人も少なくありません。ここで紹介する例はわずかですが、子どもたちがつながる国の近代史にも目を向けてみましょう。

■在日コリアンの人々

1910年から1945年の終戦まで36年間,日本の植民地下にあった朝鮮半島からは多くの人々が日本に渡り、終戦当時には230万人以上が日本に在住していたといわれています。

こうした人々とその子孫は、通称名を使用している場合も多く、また日本国籍を取得する人も増えているため把握が難しくなっています。しかし、神奈川県では教員が朝鮮半島にルーツをもつ子どもたちに出会う可能性は高いと言えるでしょう。また、神奈川県内にある朝鮮学校（初級4校、中高級1校）で学ぶ子どもたちもいます。

■中国帰国者の人々

1945年の終戦当時、旧満州（現在の中国の東北地方)には、軍人の他に155万人の日本人が住んでいました。終戦後の混乱の中、多くの子どもたちや若い女性たちが中国に残されました。これら帰国者と呼ばれる人たちが日本に帰国できるようになったのは1972年の日中国交正常化後のことで、終戦から27年たち中国で家庭を築いている人がほとんどでした。帰国者の人たちは長年中国で生活したため、ことばや習慣の違いから多くの困難に直面しました。

最近では、その孫やひ孫が県内の小中学校に在籍しており、日本生まれの子

どもも増えています。しかし日本名の子どもであっても、その保護者が日本語を十分に理解していない場合もあり、配慮が必要です。

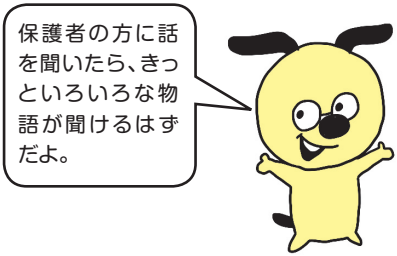
■インドシナ難民の人々

1975年から1976年にかけてインドシナ三国（ベトナム・ラオス・カンボジア）で誕生した新政権から迫害を受ける恐れのある人々などが難民として国外に流出しました。日本では、1979年に神奈川県大和市と兵庫県姫路市に定住促進センターが開設され、1981年には難民条約にも加入し、難民の受け入れを開始しました。大和定住促進センターは1998年に閉所されましたが、現在でも神奈川県内に住むインドシナ半島出身の人々の数は全国最多で、日本の学校に通う難民2世・3世、また祖国からの呼び寄せで来日する子どもも少なくありません。

■日本から南米へ、南米から日本へ

日本から南米への集団移民は、1899年のペルーへの農業移民から始まりその後、ブラジルを中心に南米各地にひろがりました。第二次世界大戦中、北米アメリカでは、日本人と日系人が強制収容所に連行されましたが、南米でも日系社会のリーダーたちがアメリカの収容所に送られたり、日本人学校が強制閉鎖されました。戦後になると行政主導によって、または自主的に南米への移民が再開されました。

現在6世代まで代を重ねる日系人の人々ですが、1990年の「出入国管理及び難民認定法」（入管法）の改定後、南米から日本に就労目的で移り住む人々が増え、定住化が進んだ現在、多くの子どもたちが日本の学校で学んでいます。



4−5　差別・偏見って何だろう

■差別について

社会科の教科書では、差別されてきた歴史をもつ人々として、マイノリティである「アイヌ民族」や「外国人」が取り上げられています。このような負の部分を学ぶことはとても大切ですが、当の本人たちがその記述を見たらどのような気持ちになるかも考えてみましょう。実際に自分や家族が経験したことを思い浮かべ、「やっぱり差別があるんだ」と思うかもしれません。同級生たちが「外国人」に対する偏見や先入観を強めてしまうかもしれません。子どもたちの状況や人間関係にもよりますが、現状と向き合い、なぜ差別は起きるのか、解決するにはどうすればよいかを考えるなど、少し掘り下げて取り上げてみましょう。道徳の授業と組み合わせて取り組むなど工夫もできますね。

■本人たちに向けて

教科書の記述を読み、外国につながる子どもたちが嫌な気持ちになったり、悲しい気持ちになっているかもしれません。実際に外国人であることを否定的に捉えていたり、いじめに苦しんでいる、学校を休みがちなケースもあるかもしれません。気になることがある場合、子どもたちとじっくり話す機会をつくってみてください。

■クラス全体に向けて

「外国人」ということばについては、残念ながら新聞・テレビで、犯罪などマイナスな部分が誇張されたかたちで取り上げられることが多くあります。「外国」で起きる事件についても同様で、1996年にペルーの大使公邸占拠事件が起きた時は、日本に住むペルーの子どもたちがいじめられる事件が起きまし

た。「外国」「外国人」ということばに対して状況によっては非常に否定的なイメージを抱いているかもしれません。

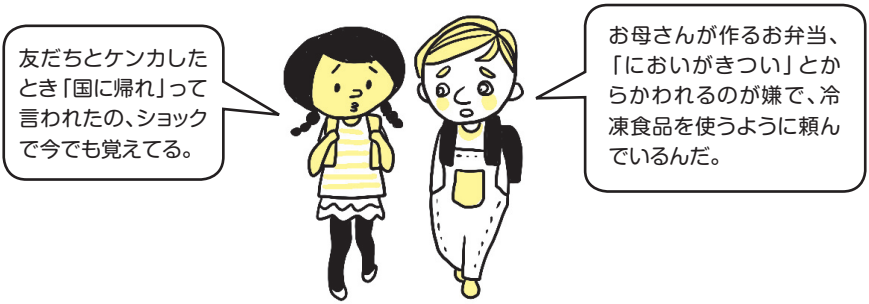
クラスの中で「○○さんの国」というふうに、個人に結びつけてことばや文化を知り、理解する機会が日頃からあれば、国にとらわれず、誤ったステレオタイプを見破るような考え方を身につけることができるのではないでしょうか。今や日本には多様な国・地域出身の人々が住むのが当たり前になってきていることを伝えていくことも大事だと思います。残念ながら「差別」は存在するけれど、自分たちで解決していく努力ができるんだということも伝えていきましょう。

■クラスの中でのトラブルを話し合いの機会に

「差別」ということばを使うと、大げさで自分たちには関係ないことと感じる場合もあるかもしれません。難しいことを言わなくても、クラスの中ではいろいろな個性をもつ子どもたちが自然に「共生」しているのかもしれません。

しかし、些細なことが原因で起こるケンカやもめ事の時に、思わず「外国人のくせに」といった発言が飛び出してしまうこともあるようです。

悪意はなかったかもしれないけれど出てしまった一言が、実は差別につながるんだ、ということを取り上げ、話し合いの材料にすることもできるでしょう。



4−6　身近な外国を知ろう

■身近な国をもっと身近に

6年生の社会科では、自分たちの「関わりが深い国」を調べる単元があります。教科書が取り上げている国々は、クラスで学ぶ子どもたちがつながる国であることが多いのではないでしょうか。子どもたちがつながる国を取り上げ、遠い外国としてではなく、自分と同じ学校に通う仲間のルーツがある国として取り上げ、調べる機会にしましょう。

教科書に掲載されていない国の場合であっても、保護者の協力が得られれば、写真や物品など生きた素材が集まるでしょうし、その国の出身者にインタビューをすることで、内容を充実させることができるでしょう。適確なインターネットサイトを活用すれば豊富な資料を入手することができます。

■県内の多文化共生に関する活動

神奈川県には16万7893 人（2011年末、神奈川県国際課調べ）　の方が外国人登録をしており、県民の53人に1人が日本以外の国籍をもっていることになります。日本語の理解が十分でない人もいるため、行政が多言語対応による相談窓口を設置したり、住居や医療、教育などの分野では専門的な対応がされています。

また、住民同士の交流をすすめるために国際交流ラウンジが設置されている自治体もあり、交流活動や日本語教室などがおこなわれています。インターネットで得られる情報や、各機関・団体が発行している広報物なども調べ、学習の参考に活用してみましょう。

（関連団体については42ページを参照）

■電車に乗って行ける県内の多文化スポット

神奈川県内の学校の近くにもきっとたくさんの場所があるはずです。

【横浜ユーラシア文化館】（横浜市中区）
ユーラシア各地の文化を伝えるさまざまな資料の展示
www.eurasia.city.yokohama.jp/

【海外移住資料館】（横浜市中区）
日本人の海外移住の歴史、そして移住者と日系人の現在の姿を伝える資料館。
http://www.jomm.jp/

【あーすぷらざ（県立地球市民かながわプラザ）】（横浜市栄区）
国際理解や国際平和、地球規模の課題について考える総合的な学習施設
http://earthplaza.jp/

【湘南台文化センター子ども館】（藤沢市）
世界のおもちゃや民族衣装の展示等
http://www.kodomokan.fujisawa.kanagawa.jp/index.html

【コリア庭園】（横浜市鶴見区）
李朝期貴族の山荘庭園をイメージした庭園
http://www.kanagawaparks.com/mitsuike/guide_win/Korea.html

【国際交流ラウンジ】（県内各地）外国語による相談、日本語教室のほか、
交流事業も多数実施。42ページ参照

【横浜中華街】（横浜市中区）
関帝廟、媽祖廟などの寺がある他、年間通じて中国の催しを開催。
http://www.chinatown.or.jp/

4−7　小学校から中学校へ

3月に小学校を卒業すると、子どもたちは4月から中学生になります。制服や学用品の購入、各種手続きなど具体的な準備も必要ですが、学習面、教員や先輩、同級生との関係など、心の準備についてもサポートができると安心です。

■子どもに対して伝えたいこと

中学生になると、教科が増え、定期テストも始まります。授業の内容も難しくなり、遅刻・欠席や授業態度、宿題やノートの提出も成績評価の対象になります。学習面については、中学1年生から高校受験を意識して進める必要がありますが、保護者や周囲に中学校を経験した人が少ないため、中学校生活の詳細についてイメージができていない場合があります。

部活動での先輩とのかかわりなど新しい人間関係も生まれますし、教科担任制をとっている中学校では、教員との距離も小学校とは大きく異なります。中学入学時には戸惑うことが多いので、子どもたちが小学校在籍時から十分な情報を得て心の準備ができ、スムーズに新しい生活になじめるようなサポートを考えましょう。

■保護者に対して伝えたいこと

日本の学校制度に不慣れな保護者は、高校受験についての情報をほとんど知らない場合があります。また、中学入学準備のためにある程度まとまったお金が必要なことを知らず工面できないこともあるので、早い時期からの情報提供が必要です。中学校の部活動は、早朝や放課後だけでなく週末にも活動があることなど、中学校生活の具体的な情報を伝えると有効です。

コラム　<外国につながる子どもたちの未来のために>

大谷　千晴（平塚市立春日野中学校教諭）

外国につながる子どもたちは、「他の人とはちがう」ということを気にして、自分の存在に不安を抱きがちです。学校で安心して過ごすためには、「あなたはあなたのままでよい」と認められる体験の積み重ねが大切です。

子どもたちは、時にはいじめや残酷なことばに苦しむこともあるでしょう。しかし、寄りそってくれる先生がいて、その子どもの背景やルーツに興味を持って関わり、励ましてくれれば、その子の自信につながります。また、子どもだけでなく保護者に対するエンパワー（力づけ）も心がけてください。その経験が先生方自身の成長にもきっとつながるはずです。

学習に関しては、あきらめず継続するように声かけすることが子どもたちの支えになります。きれいな字を書いたらほめ、たくさん練習してきたらほめ、覚えたことばを使えたらまたほめてください。勉強のためのみならず自分を表現する語彙がないのはつらいものです。また、基礎的な計算ができないと、中学での学習や高校受験にも影響します。高校を中退してしまう生徒たちは、小学校の基礎的な内容を理解していない場合が多いのです。小学校の取りこぼしを中学校で補い、中学校の取りこぼしを高校が補う場合もありますが、高校の取りこぼしを社会が担ってくれるわけではありません。外国につながる子どもたちが日本社会で大きく羽ばたいていけるように、小中学校間で連携して彼ら・彼女らを支えていきたいですね。

第5章　資料集
5−1　関連団体・相談窓口

<外国につながる子どもに関する教育相談>

■あーすぷらざ外国人教育相談

http://www.earthplaza.jp/forum/foreign_education/
TEL:045-896-2970（火〜土 10:00〜17:00＊13:00〜14:00休憩。祝日は休み）
FAX:045-896-2894　E-mail:soudan1@earthplaza.jp
住所:横浜市栄区小菅ヶ谷1-2-1 県立地球市民かながわプラザ（あーすぷらざ）
2階　情報フォーラム（JR根岸線本郷台駅よりすぐ）
＊対応言語（火）タガログ語　（水）ポルトガル語　（木・土）中国語　（金）スペイン語

■かながわ外国人教育相談

http://www15.plala.or.jp/tabunka/index.htm
TEL:045-222-1209　（毎月第2・4土曜日　10:00〜13:00）
住所:横浜市西区みなとみらい1-1-1パシフィコ横浜 横浜国際協力センター5階
対応言語（第2土曜）スペイン語・中国語（第4土曜日）スペイン語・英語
<神奈川県内の主な国際交流協会・国際交流ラウンジ>
外国語対応の情報提供や相談対応や多様な事業をおこなっています。

■公益財団法人 横浜市国際交流協会（YOKE）

http://www.yoke.or.jp/
横浜市西区みなとみらい1-1-1 パシフィコ横浜 横浜国際協力センター5階
TEL 045-222-1171（代）　FAX 045-222-1187　E-mail: yoke@yoke.or.jp

■財団法人川崎市国際交流協会

http://www.kian.or.jp/index.html
川崎市中原区木月祇園町2-2
TEL:044-435-7000　FAX:044-435-7010　E-mail:kiankawasaki@kian.or.jp

■財団法人大和市国際化協会

http://www.yamato-kokusai.or.jp/
大和市深見西8-6-12 大和市役所分庁舎2階
TEL:046-260-5126　FAX:046-260-5127
E-mail:pal@yamato-kokusai.or.jp

■NPO法人　横須賀国際交流協会

http://www.yia.info
横須賀市日の出町1-5　ヴェルクよこすか2階
TEL:046-827-2166　FAX:046-827-2167
E-mail:npo-yia@kb3.so-net.ne.jp

■さがみはら国際交流ラウンジ

http://www1.odn.ne.jp/sil/
相模原市中央区鹿沼台1-9-15
TEL/FAX:042-750-4150　E-mail:s-i-l@ams.odn.ne.jp

■青葉国際交流ラウンジ
http://aoba-lounge.sakura.ne.jp/
横浜市青葉区田奈町76
TEL:045-989-5266　FAX:045-982-0701
E-Mail:aobaloungeintl89h1@t07.itscom.net

■金沢国際交流ラウンジ
http://www.kanazawalounge.org/
横浜市金沢区瀬戸22-2横浜市立大学シーガルセンター2F
TEL:045-786-0531　FAX:045-786-0532
E-mail klounge@shore.ocn.ne.jp

■港南国際交流ラウンジ
http://www.mmjp.or.jp/konan-international-lounge/
横浜市港南区上大岡西1-6-1ゆめおおおかオフィスタワー13F
TEL:045-848-0990
E-mail:konan-international-lounge@yokohama.email.ne.jp

■港北国際交流ラウンジ
http://homepage2.nifty.com/kohokulounge/
横浜市港北区大豆戸町316-1
TEL:045-430-5670　E-mail:kohokulounge@yokohama.nifty.jp

■つづきMYプラザ（都筑多文化・青少年交流プラザ）
http://tsuzuki-myplaza.net/
横浜市都筑区中川中央1-25-1 ノースポートモール5F
TEL:045-914-7171　FAX:045-914-7172
E-mail:my-plaza@tsuzuki-koryu.org

■なか国際交流ラウンジ
http://nakalounge.main.jp/
横浜市中区日本大通34
TEL:045-210-0667　FAX:045-224-8343　E-mail:nakalounge@yoke.or.jp

■保土ケ谷区国際交流コーナー
http://www.hodogaya-kokusai.com/
横浜市保土ヶ谷区岩間町1-7-5
TEL:045-337-0012　FAX:045-337-0013
E-mail: toiawase@hodogaya-kokusai.com

■みなみ市民活動・多文化共生ラウンジ
http://tabunka.minamilounge.com/
横浜市南区浦舟町3-46 浦舟複合福祉施設10階
TEL:045-232-9544　FAX:045-242-0897
E-mail:minami.shimin.act.c@jcom.home.ne.jp

■鶴見国際交流ラウンジ
http://www.tsurumilounge.com/
鶴見区横浜市鶴見区鶴見中央一丁目31番2号 214 シークレイン2階
TEL/FAX:045-511-5311　E-mail:tsurumilounge@yoke.or.jp

5−2　お役立ちリンク集

<文部科学省>

「かすたねっと」･･･学習支援のための情報検索サイト
http://www.casta-net.jp/
CLARINET 帰国･外国人児童生徒教育等に関する総合ホームページ
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/main7_a2.htm
外国人児童生徒受入れの手引き（文部科学省）
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002/1304668.htm
＊「外国人児童生徒のための就学ガイドブック」と就学ガイド（概要版）は多言語版で用意されています。
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003.htm

<神奈川県教育委員会>

日本語を母語としない人のための高校進学ガイドブック
http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f6923/#gaikokugo
「外国につながりのある児童･生徒への支援のために Q&A集」
http://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/attachment/47868.pdf

<川崎市教育委員会>

「帰国･外国人児童生徒指導の手引きQ&A」
http://www.keins.city.kawasaki.jp/1/KE1026/h21/kikoku_gaikoku/kikokuseitosidoutebiki/kikokutebiki.doc

<川崎市総合教育センター>

「帰国外国人児童生徒教育に関するコンテンツ一覧」算数6ケ国語対訳集等
http://www.keins.city.kawasaki.jp/1/KE1026/h21/kikoku_gaikoku/kikokugaikoku.html

<厚木市教育委員会>

「あつぎまなびネット　学校生活（対訳集）」
http://www.edu.city.atsugi.kanagawa.jp/

＜千葉県教育委員会＞

「外国からの子どもたちと共に（母国の教育事情）」
http://www.pref.chiba.lg.jp/kyouiku/seisaku/g-ukeire/gakkou-sensei/bokoku.html

＜三重県教育委員会＞

「外国人児童生徒教育関連」各種ガイドブック等
http://www.pref.mie.lg.jp/GAKOKYO/HP/gaikokuzinzidouseito/gaikokuzinzidouseito.htm

＜埼玉県教育委員会＞

「日本語補助教材　彩と武蔵の学習帳」
http://www.pref.saitama.lg.jp/page/ayatomusashinogakushuuchou.html

＜豊橋市教育委員会＞

「外国人児童生徒教育資料」
http://www.gaikoku.toyohashi.ed.jp/

＜東京学芸大学　国際教育センター＞

JSLカリキュラム活用支援サイト等
http://crie.u-gakugei.ac.jp/index.htmlJSLカリキュラム活用支援サイト等

＜東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター＞

算数や国語の教材開発等　http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/cemmer/social_02.html

＜愛知教育大学　外国人児童生徒支援プロジェクト＞

教科学習教材等
http://www.resource-room.aichi-edu.ac.jp/

5−3　関連書籍の紹介

子どもたちと一緒に読みたい本を取り上げてみました。ここで紹介できる本はわずかですが、ぜひ楽しい本を探してみてください。

■世界の豊かな文化や習慣を知る

『多文化に出会うブックガイド』世界とつながる子どもの本棚プロジェクト編・著　読書工房刊

■日本に住む外国につながる子どもたちが登場する絵本・児童書

『がっこうカッパのイケノオイ』山本悦子著　童心社

アンドレくんが登場する、普通の学校での日々。2011年課題図書。

『僕のママが生まれた島・セブ』おおともやすお著　福音館書店

日本の真夏みたいに暑いフィリピンで過ごすクリスマスの物語。

『わたしはせいか・ガブリエラ』東郷聖美著　福音館書店

せいかガブリエラちゃんがボリビアと日本のくらしを日本語とスペイン語で紹介。

『クラスメイトは外国人』みなみななみ著　明石書店

きっとクラスにいる、外国につながる子どもの20の物語。

■多文化共生の素晴らしさを教えてくれる本

『フリックス』トミー・ウンゲラー 著　BL出版

イヌ語もネコ語も中途半端なフリックスの苦労と活躍の物語。

『エロイーサと虫たち』ハイロ・ブイトラゴ著 さえら書房

遠いまちの学校に転校した女の子の不安と成長を描いた物語。

■日系移民に関する学習を学べる本（教師用）

『日系移民学習の理論と実践―グローバル教育と多文化教育をつなぐ―』

森茂岳雄・中山京子編著　明石書店

5−4　かながわ国際交流財団の事業について

かながわ国際交流財団は、「多文化共生の地域社会かながわづくり」や「県民、NGO等との連携・協働による国際活動の支援」等に関する諸事業に取り組んでいます。

＜かながわ国際交流財団がおこなう教育関連事業＞

■研修の企画相談対応、講師派遣

「外国につながる子どものサポート」「日本語・教科指導」「多文化共生」「人権教育」「地球市民学習」などをテーマとした研修の企画をお手伝いしています。

■「かながわ日本語学習マップ」の運営

http://www.k-i-a.or.jp/classroom/

神奈川県内で活動する「学習支援教室」「母語教室」「日本語教室」についての情報を掲載しています。

■調査活動の実施

神奈川県内の外国人コミュニティや支援活動の現状を把握する調査を実施しています。

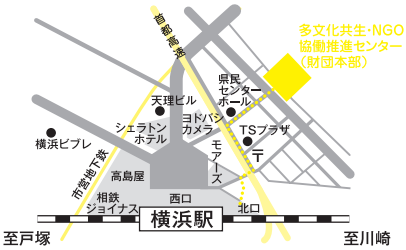
■外国につながる子どもの教育に関するフォーラムの実施。

2011年度　「外国につながる若者の進路サポート」

2010年度　「日本社会は外国につながる子どもたちをどのように育んでいけるのか」

【教育に関するよろず相談受付中!】

かながわ国際交流財団
開所時間:月〜金　8:30〜17:15
アクセス:横浜駅きた西口より徒歩5分
TEL:045−620−0011　FAX:045−620−0025
e-mail　tabunka@k-i-a.or.jp
URL: http://www.k-i-a.or.jp/



執筆者一覧（敬称略・順不同）
中山　京子　　（帝京大学准教授）
成川　弥生　　（横須賀市日本語指導員）
富本　潤子　　（かながわ国際交流財団）

協力（敬称略・順不同）
石井　孝　　（神奈川県秦野警察署署長）
大谷　千晴　　（平塚市立平塚市春日野中学校教諭）
門原　香織　　（横須賀市立追浜小学校養護教諭）
小菅 真人 / Jesse K Frivaldo（会社員）

編集協力　　山家　直子
デザイン　　坂巻　聡

『外国につながる子どもがホッとする授業づくり～教科書を活用したアイデア集～』
2012年3月発行
かながわ国際交流財団
〒221-0835　横浜市神奈川区鶴屋町2-21-8　第1安田ビル4階
TEL: 045-620-0011　FAX: 045-620-0025
e-mail:tabunka@k-i-a.or.jp　URL: http://www.k-i-a.or.jp/

KIF